秋 葉 区

九条の会

No.23　2009.8.20

秋葉区「九条の会」事務局
新 津 教 育 会 館 内
新潟市秋葉区善道町 2－9－44
Tel 0250-21-3691　Fax 0250-21-3692
http://www7a.biglobe.ne.jp
/~hiro-line/nk9jo/index.htm

戦争しか知らなかった
―小国民の戦争体験―

星山　圭（新津本町）

私は昭和 8 年生まれ、幸い幼くて戦場にかりだされずにすんだために戦場体験はありません。しかし、国家がどのように戦争を強制するか、子どもをどのように兵隊に仕立てていくか、そうした戦争体験は語ることができます。

64 年前の夏

昭和 20 年 8 月、原爆などの数知れない悲劇を残して、無意味な戦争が負けて終わった時、12 歳の中学 1 年生だった私は「あ、戦争は終わることもあるんだ」と思いました。生まれた時から戦争で、いつまでもつづくと思っていたのです。生まれた頃、日本は言論弾圧が荒れ狂い、日に日に戦争色を強めていました。やがて中国侵略を本格化、あげく世界を相手に戦争に突っ込んでいきます。若者が出征、まもなく骨になって帰ってくることが日常に。子どもの真白な脳には「天皇は生き神様」「天皇に命を捧げることが最高の名誉」といったことが、これでもかとすりこまれ、みんな骨のズイからの軍国少年になって、将来はと聞かれると一人の例外もなく「軍人」と答えるようになります。戦争に対して平和が、圧制に対して自由があることなど、ことばさえ知りません。すでに完全に口を封じられていた大人も教えてはくれません。命がけで戦争に反対した人々がいたことなど想像の外でした。まさに、無知と狂信の時代でした。

昭和 6 年	満州事変
昭和 8 年	小林多喜二　虐殺（0 歳）
昭和 12 年	日中戦争（4 歳）
昭和 16 年	太平洋戦争（8 歳）
昭和 20 年	敗戦（12 歳）

「終りにみた街」無知と狂信の時代 ふたたび？

シナリオライターの山田太一に「終りにみた街」（中公文庫）という小説があります。ある一家が昭和 19 年にタイムスリップ、一家の言動がことごとく犯罪になるという身の毛もよだつ恐ろしい物語です。山田太一は警告します。タイムスリップがゆっくりしているために気がつかないが、私たちは狂気の時代にもどりつつあるのではないか。安倍元首相らは、あの時代を「美しい」といい、復活を唱えています。ビラを配っただけで捕まる。君が代を歌わない教師はクビ、警告が現実味を強めています。私は憲法の規定する「思想、良心の自由」「学問の自由」「集会・結社・表現の自由」がこの上なく大切だと思っています。九条も自由があればこそ、もし自由が失われれば間違いなく戦争がやってきます。あのいまわしい無知と狂信の時代は、もう二度とごめんです。

平和のメッセージ

平和憲法を瞳のように大切に！

木村一枝（田家２）

よく講演会などに聞く戦争中の悲惨な体験は、私自身にはあまりありません。終戦の翌年、小学校入学時のささいな出来事が、私の反戦感情のトラウマになっています。今年３人目の女孫が小学校に入学しました。２ヵ月も前にランドセルを購入してもらい、胸おどらせながら入学式で登校しました。夫婦付き添いの光景を見ながら、平和の尊さをしみじみかみしめました。

私も小学校入学は赤いランドセルを背負ってと、入学前から想いをはせていましたが、戦後の物不足時代、ランドセルが手に入りません。当時で相当高いヤミ市やっと見つけてもらいましたが、赤いランドセルではなく黒しかありません。入学の喜びもいっぺんに消え、皆になぐさめられしかたなく黒いランドセルで入学しましたが。皆に笑われたり、いじめられるかと心配でたまりませんでした。幸い誰も何ともいいません。ランドセルのない子もいて、ホッとした思いでした。それ以降、赤いランドセルにあこがれて心の傷となって思い出されます。その当時は、食糧難の時代といいますが、農家の子供ですから困ることはなかったようですが、物資不足が大変でした。全て配給ですから、お金ではなく、ヤミでお米と交換です。命にかかわる悲惨な体験からみればたいしたことはありません。

私の夫の子供時代（特に都会っ子）は、その後の人生を変えるほどの体験だったようです。よく8月の原水爆大会の頃になると学童疎開のこと、東京大空襲の惨状などを聞かされていました。焼け出されて家族全員へ転居したが、間もなく広島原爆の次は新潟だということになり、退避命令が出ました。市内から人がいなくなるという異常事態発生、夜は布団をかぶって浜で過ごしたことなど、中学時代に体験したことは鮮明に記憶していました。退職後は当時の人達と連絡し合い、学童疎開連絡会をつくり、よく上京していました。私は戦後すぐの民主教育を受けた年代だと思います。憲法前文はよくテストに出されました。

今はどうでしょう。私が看護士として働いていた頃は、あまりにも命の不平等を痛感させられ、これではいけないと思い、平和、革新を願いながら働き続けました。退職後のいまの変わりようはどうでしょう。年齢で医療が不平等化され、海外派兵、国民生活は貧困化し、人権無視がまかり通る政治です。戦後「国家として二度と戦争しない」と約束した憲法、特に９条は誇るべきものです。尊い犠牲のもとにつくられた憲法を瞳のように大切にして政治の中心になることを切に願ってやみません。

子どもと戦争

小林正明（西古津）

私は 1935（昭和 10）年 12 月 9 日、新潟市江南区直り山の小林石松宅に生まれました。私の記憶では、２，３歳頃は、自転車も、自動車も見たことはありませんでした。家の前が坂道で、毎日友達と裸で遊んでいましたが、昭和 14 年 8 月、私が 4 歳の年に、明治生まれの婆さんが、「近々戦争が始まるから気をつけて遊べよ」と言いました。「何で戦争なんか始めるの」と聞くと、「軍人の大将どもは、“勝った勝った、又勝つ”といって、戦争を仕掛ける、困った欲望の動物どもや」と言いました。私には訳が分かりませんでした。

昭和 19 年 4 月 5 日小学校 2 年になりました。国語の時間は、戦争と軍隊が如何にも正しいかのような本を読まされ、学ばされていました。学校から帰って小川に魚釣りに行きますと、上から飛行機が焼夷弾をばらばら落としてくるので、麦畑に隠れて魚釣りをしていました。

19 年 9 月か 10 月頃と思いますが、学校から帰ると婆さんが大切にしておりました仏壇を取り上げられました。日本の天皇は神より偉いのかと怒っていました。戦争が激しくなり、サイレンが鳴ると防空壕に潜っておりました。

昭和 20 年、小学３年になりますと、松山のお寺に集まり竹槍の練習がありました。私は投げ捨てて帰ろうとしたら、隣の人が「非国民されるから我慢したら」と言いました。私はその後出ませんでした。私の家の裏の豊島のお父さんがきまして、「竹槍の練習にでないと聞いたが、村のものが困っている。お前の考えを聞かせてくれ。だれにも言わんと約束するから」と言ったので、私は「大人は社会人でしょう。武器を使って殺し合いをして何の得があるの。俺達が大人になったら、借金と悪い社会しか残らない。馬鹿といわれても仕方がない」と言いました。「分かった」と言って帰りました。